

# 臨床心理士の配置による保育園の家庭支援機能の強化

## ① 座談会：求められる虐待防止と養育支援

平成24年度より旭区では養育者に寄り添い、子どもの成長を守り育てていくために「養育支援強化モデル事業」に取り組んでいます。この事業は、「保育資源ネットワーク事業」を活用して、市立保育所の育児支援センター園に臨床心理士を配置し、「養育支援・虐待予防の拠点」とした区局連携の事業です。事業の三つの柱、①公立保育園への保育カウンセラーの配置

②児童虐待問題の専門家によるスーパーバイズ（注1）と研修 ③養育支援・虐待に関する旭区内でのエリア別研修を実施しています。ここでは、本事業のアドバイザーでもある増沢高氏を迎え、本事業の意義、保育園の機能強化の必要性と今後の展望などについて、お話を伺いました。

### ■事業構想の経緯

**関口** まず、濱区長からのこの事業を構想された経緯をお聞かせください。

**濱** この事業の原点は、私がかつても青少年局にいた頃にさかのぼります。当時、困難を抱える若者をどう支援するかを検討しており、背景を理解するため、職場で議論を重ねました。すると乳幼児期の大切さが見えてきました。その時期を豊かにすることにしっかりと取り組まないと、後々大変な問題が起きてくると思っています、まためたものが、この事業の原点になる社会的困難不安マップ【資料1】です。

**増沢** そうですね、困難を抱える若者が増えてきています。私は以前、情緒障害短期入所施設（以下、施設という）

に在籍していました。そこで関わった子どもたちは、例えば小学校4年生で、トイレに行きそこで用を足しトイレトーパーを使うという当たり前のことを教わっていない前かたり、小学校6年生で入浴後に洗濯された清潔な下着を身に付けるとい生活習慣がない子どもたちでした。想像を超えるような環境で育っており、非常に驚きました。不適切な養育により、基本的な生活習慣が身につけていなかったり、人間関係をつくれなかつたり、また、成長しても就労できないなど、様々な困難を抱えています。

**濱** 子供の育つ環境がいかに大事かということですね。旭区長となり、保育園の待機児童対策を議論する一方、保育の質をどう高めるかも検討していました。そこで、乳幼児

期から心理的なアプローチができないものかと、臨床心理士を保育カウンセラーとして保育園に配置してはどうだろうかかと職員に投げかけました。すると、増沢先生にスーパーバイズをお願いするとともに、左近山保育園に保育カウンセラーを配置する案を持つてきました。私は先生の児童虐待に関する本を読み、熱い想いを知っていましたので、嬉しかったですね。事業のきっかけは提案しましたが、中の仕組みを考えたのは、熱い想いをもつ現場の保育士や職員でした。【資料2】

**関口** 実際に事業を実施してみても、いかがでしたか。

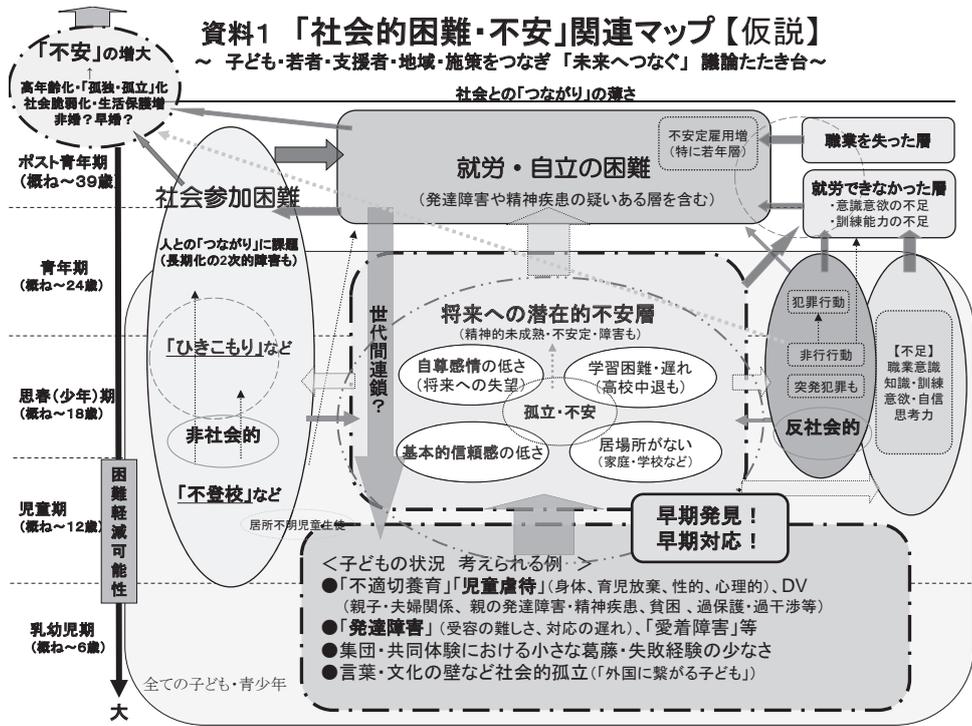
**濱** 臨床心理士の方は、通常、事前に時間と場所を決めて相談を受けることが多いのですが、今回の事業の一番の

### 増沢 高

子どもの虹情報研修センター  
研修部長

千葉大学大学院教育学研究科教育心理修士課程修了。情緒障害児短期治療施設「横浜いずみ学園」セラピスト、学園副園長を経て、子どもの虹情報研修センター（日本虐待・思春期問題情報研修センター）に勤務。明治大学文学部及び大学院文学研究科兼任講師。





利点は、必要な時にすぐ立ち話のような感覚で、現場にいる心理士に相談できることです。これが大きな効果に繋がっていると感じます。実際に、同じ保育職場の仲間として心理の専門家がいて、安心して、気軽に相談ができ、安心

して保育ができるという保育士の声が挙がっています。そして、ここでの保育カウンセラーは、基本的には保護者や子どもへのカウンセリングではなく、保育士をコンサレーションにより支援します。保育士は保育の専門家です。

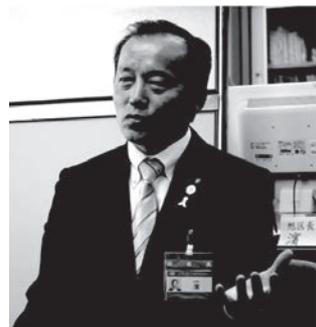
### 資料2 養育支援「あさひ」モデル (市立保育所・保育資源ネットワーク活用型)



ですが、近年は心理の問題など、様々な難しい問題が多くあります。そのような問題に取り組み時に、専門的な視点から、こういう見方がある、こういうアプローチもあると、新たな視点を保育士が知ることが出来ます。公立・民間を問わず、多くの保育士から、この取組みをぜひ今後多くの園で行ってほしいとい

う声も挙がっています。関口 増沢先生はどんな感想をお持ちですか。増沢 私が施設にいたとき、子どもの生活に入って、指導員や保育士の方と一緒に目線で子どもの生活の場で具体的な子どもの様子を見ることがコンサルテーションを行う上

濱陽太郎  
旭区長



奥本 千代子  
旭区総務課担当係長

関口 昌幸  
政策局政策課担当係長

(注1) スーパーバイズ  
ここでは、臨床心理士が、自分のアセスメントの過程について助言を受けるために、より経験豊かな臨床心理士に、アドバイスをもらうことをさす。

で非常に重要でした。その後、子どもの虹情報研修センターに来て、地域の中で必要保護ケースの支援を考えるようになり、保育園はとても大切な場所だと感じるようになりました。

子どもたちは、児童虐待を受けて児童相談所などが介入した場合でも、生命に危機がある深刻なケースを除いては、不適切な環境ではあるものの家庭に戻り、在宅で支援を受けていくことが大多数(約9割)です。つまり、家庭の次に長い時間を過ごす保育園で、子どもの育ちの取り残してきた部分や心の修復をどう担うのが重要となります。その大切な場に臨床心理士が入るようになったことは重要なことだと思います。

### ■保育園の役割の変化

**増沢** 現在この事業では、2ヶ月に一度、スーパーバイズのため、保育カウンセラーが具体的な保育園での困難ケースを持って、私のところに相談に来ます。その相談されるケースは、驚くことに、以前私がいた施設で見えなかった子どもたちと、示す行動等が重なることが多いので、ケースの深刻度は違うも

の、「地続きの課題」を抱えているのです。今の保育園は、これほどにも困難な課題を抱える子どもたちと関わっているのかと本当に驚きました。

生命の危機にまで至らなくても、幼少期のネグレクトは実はとても深刻なのです。それを放置しては悪循環に陥り、その子どもの育ちは歪んで行きます。家庭で提供できない子どもの育ちに必要ない子どものが重要な諸々の要件を早い段階で取り戻すことが重要で、それを保育園という場で提供することはとても重要です。

一方、保育園は集団保育の場であり、集団をうまく機能させる場ですが、そこにうまく適応できない子どもを、どのように理解し、大切に扱うのか。適応できないままにしないようにするには個別的な視点が必要です。この対応は、今までの保育園の機能からのりしろを伸ばして、個別的な支援を展開する必要性を含むものです。その際、心理士のコンサルテーション、子どもをどう理解するのか、具体的にこんな手立てはどうだろうかという提案はとても役に立つだろうと思います。心理士配置のこの取組は、必須の取組みではないかと

思っています。スーパーバイズを通し、施設での生活臨床で展開している現実が、保育の現場にもあることを再認識しました。

**濱** 子どもたちの脳の形成は2か月ごろから始まり、11歳ごろには大人と同じような脳の作りになると言われています。その吸収の段階、大人の基礎をつくる大事な時期に、虐待などの不適切な養育を受けるほど、将来の困難に繋がります。それを防ぐためには乳幼児期に信頼できる大人(保育士等)に出会い、どれだけの養護や支援を受けたかが大切になってきます。

私は、乳幼児期の思い出や関わりが、その子どもたちの十年、二十年後の貴重な人生の道しるべになるのだと思います。小学生、中学生になつたときに、安心できるよりどころがあるとこの感覚が持てるのが大事で、そのために保育園でこの取組を行うことが大事だと感じています。

**増沢** おっしゃる通りだと思います。

施設や社会的養護の現場に入所してくる子どもたちには2つの山があります。ひとつは、入所後、そこでの暮らしに適応し、関係を築いていく

ステージ。もうひとつは、思春期。自分は人と比べてどんな人間か、自分の置かれた境遇、家族のことなど、これまでの人生を振り返る時期で、自己評価がどうであるかはこの時期の中心的なテーマとなります。自分は虐待を受け、大切にされなかった存在、愛されなかった存在などと捉えてしまうと、自己評価の低下は避けられません。みんなからずっと捨てられてきたような自分に未来はないなどと、今後の展望や希望さえ抱けなくなってしまうのです。

しかし、入所中の子どもたちは過去に虐待を受けてきたものの、その子自身の中には必ず光るものを持っていきます。また心の奥では、自分を認め、支えてくれる人を求め続けています。子どもを認め受け止める大人に出会えるかどうかは重要です。家庭以外で一番長く過ごす保育の場で関わる保育士がその存在になる可能性は非常に大きいのです。子どもたちは、家庭でも

外な場でも与えられていることがありません。実際に、思春期の中学生が自分を大切に、愛情を与えてくれた保育士に会いに保育園に行き、昔の話聞き、笑顔で抱かれている

写真を見ることで、自分が大切にされてきた事実を実感し、自分や周囲への認識がずいぶんと好転したという例はよく聞きます。

**濱** 乳幼児期は、自己肯定感の基礎をつくり、人は信頼してもいいという基本的信頼感を養う時期です。この時期にネグレクトや不適切な養育を受けると、人を信頼できない、誰も助けてくれないと感じてしまいます。一番にすべき親からの虐待は、基本的信頼感の構築に大きな影響を及ぼします。その大事な時期に、保育士や臨床心理士の協力を得ながら、どれだけ子どもの心を豊かにすることができるか。それは人間の尊厳や成長に欠かせないものです。

そして、この取組は、将来への効果を信じ、確かにそうだとすることを積み重ねていく必要があるのですが、残念なのは、効果がすぐに証明できないことです。

**増沢** アメリカやイギリスでは、就学前の子どもにどれだけ手をかけるのか、生涯コストを計算した研究があります。親子の信頼関係をベースにした躰を十分に受けていな

いと、その後の人生が悪循環になってしまふ。思春期には非行に走り、精神的に破たんするかもしれない。医療にかかる率も高くなる。また、場合によっては犯罪に手を染めるかもしれない。それらの要因を放置すると、どれだけ社会の損失につながるか。7歳までに手をかけることが、実は地域、国家にとっての損失を防ぐことに繋がるのです。

**関口** そうですね。高齢化により高齢者への福祉に重点が置かれますが、人生の早い時期に、しっかりとした社会保障が必要で。保育園での生活の保障や、学校での寄り添った支援が、社会全体の安定につながります。今回の施策は、その点で非常に重要な意味を持つと思います。

**増沢** ええ、本当に重要ですね。それから、世代間伝達の問題があります。米国では、虐待を受けた子どもが大人になったとき、3〜4割がまた虐待をしてしまうというデータがあります。しかし、裏返せば6〜7割は虐待をしない親になるのです。そこを分ける3つの要因として、①受けてきた虐待の質、②その子自身、③信頼できる大人に

出会えたか、があると云われています。信頼できる大人と出会えるか出会えないかが運であつてはいけないと思いません。保育園をそうした大人に出会える可能性の高い場所にするという意識を強く持ち支援の手立てを厚くすること、世代間伝達を食い止める可能性がぐつと高まると思います。社会的養護、発生予防、介入、早期発見、在宅支援などの目的は、世代間伝達を食い止めることに集約されます。貧困も含め、今の状況を次の世代に繋げないこと。その支援として乳幼児期に注目することは非常に重要です。

#### ■アウトリーチ型支援

**濱** 横浜市では、民営化の推進により公立保育園は今後86園から54園になっていきます。園から54園になっていきますが、保育資源ネットワーク事業により、公立保育園を民間保育園等の保育資源の連携の中核として位置づけていきます。公立保育園は、周辺の保育資源と連携し、困難事例も支援していきます。

私たちの取組では、カウンセラーは周辺の保育資源にも行きます。これは、一つの事例は、周辺の園の事例にも該当することがあるからです

が、連携推進によるネットワークの強化も果たしています。

さらに、保育園は、園に通っていない地域の子どもたちに対する支援の役割もあります。保育園の地域開放などの機会を通し、地域の親子を支援できる可能性があるのです。このような場で、臨床心理士が活躍する場面があるように思います。

**増沢** 臨床心理士の福祉部門では、近年、社会的養護、子育て支援が注目されて来ています。特に、地域の在宅支援は臨床心理士の世界にとつて、強化すべき臨床現場と言えるでしょう。

**濱** 臨床心理士の役割において、臨床心理的地域援助にあたるコンサルテーションをどうしていくかが大切だと思います。社会的養護や子育ての分野でアウトリーチしていくことが必要です。自分から相談に来てくれる人への支援だけでなく、相談に来られない人々にどうアプローチしていくか。保育園が地域の拠点となつて、どのように家庭にアプローチしていくか。こちらから手を差し伸べていくことが心理士に期待されていると思いま

す。ただ、この部分の仕事はまだ少ないですよ。

**増沢** そうですね。しかし、きちんとアウトリーチして、同じ目線で生活を見る必要があります。幼少期から不適切な環境下にいる子どもたちには、衣食住や暮らしぶりを把握しないと十分なアセスメントができないのです。食事、排せつ、入浴、着替えなど、基本的な生活面で課題をもつ子どもが保育園でも増えていると思います。それは、保育士だけでなく、子ども自身が困っている部分です。そこを一緒に見て、どうするのかを具体的に一緒に考える。同じ目線に立ったコンサルテーションをしていくことが非常に大事です。また、上から目線では絶対にだめなので、保育士と一緒に考えていく心理士が求められていると思います。

そして、そこに家族にどういう風に参加してもらうかですね。保育の現場も一緒にこの子を育てていく協働養育者というスタンスで取り組むことです。「親御さん、それではだめですよ、こうしてください。」という指導的な関わりでは親御さんには受け入れられません。保育士と心理士と保護者が同じ土俵で子どもを考え、保護者ができること

から行っていたら、徐々に家族支援の中身を厚くしていく発想が重要だと思います。

#### ■小さな単位のネットワークとコーディネーター

**増沢** 就学前の保育園のような、人生の基礎づくりの時期における支援は本当に大切ですね。とはいえ、今、多様化する支援ケースに対応するには、複数の機関が連携する枠組みが必要です。保育園のネットワークと共に、エリア内での総合的な機関協働ネットワークを今後どう作っていくかが重要で。

旭区の取組みで素敵な点は、区内を、保育園を拠点とした五つの小さな単位の分けてネットワークを構想されたことです。人口約25万人の大きな区をひとつのネットワークにしては、手が届きにくく、重大なケースの見落としに繋がる危険を高めま。『小さな単位』はとても大切な視点で、3万人から4万人位の単位が適切だと思います。例えば、保育園児と小学生の兄弟がいる家族の支援においても、保育園と小学校が独立した対応をするのではなく、それぞれの情報を共有し、面的なアプローチができ

る統合された支援の方がよりよい支援になるでしょう。「統合的な支援」は、これからの子育て支援のキーワードになると思います。それには、小さい単位、顔と顔が見える単位でのネットワークです。

**関口** 小さな単位でのネットワークについて、保育園の園長経験のある奥本さんはどのように考えますか。

**奥本** 目の前にいる子どもの「姿」を、その家族の背景も含めた「像」として見るには、近くにいる様々な機関が相互に相談できる環境が重要だと思います。小さな単位で、日頃から顔が見える関係があれば、自分達では見えない背景や情報が集まり、連携した支援ができると思います。

**増沢** そうですね。親御さんが困っているケースでも、その困り感が生活のどの場面にあるのかを見て、それをお母さんと一緒に振り返ることが大切です。例えば、朝食に時間がかかりイライラして子どもにあたってしまふのか、あるいは入浴の場面なのか。具体的な像を把握するには、月に1回訪問して話を聞くだけでは難しく、やはり日頃から

近くにいることで見えることがあるのです。近くにいる人たちが相談しあうことが一番大切なのです。また、相談しようと思えば思った時に、近くであれば相談に行けますが、遠い場所ではなかなか相談に行けないのです。

次に、小さな単位の中にある機関同士をどう繋ぐかが大切です。ネットワークの中でどう繋がって支援していくか。そこには、保健医療との連携も大切です。家族支援には、妊娠期からの保健師たちによる支援も大事で、そこと保育園が繋がって親子を一体的に支援できたら、より重層的な支援に繋がります。そのためにも、機関同士をうまくまとめていくコーディネーターの存在が大事です。

**関口** そうですね。この事業は、保育園を基軸にしてうまく小さな単位でネットワークを構築していますね。そのネットワークの中で、小・中学校、学童、子育て支援拠点などどう連携していくか。教育・福祉・医療が一体となって支援していくためのコーディネーターについて、濱区長はどうお考えでしょうか。

**濱** 周辺の保育園同士の関係

を主にして、区役所や児童相談所も入り、全体で連携する必要があります。区役所がコーディネーター的な役割を果たすことが大事になってきます。また、妊娠期を含めて考えると、保健師が持つ情報を共有することも必要です。現在、保育カウンセラーは、学校カウンセラーと年に2回ですが、意見交換をしています。お互いのやり取りを密にするほど意味があると思います。保育園と学校の関係に、多くの人が関わることで、さらに子どもの成長を支えていくことができると考えます。

#### ■今後の展望

**濱** 保育の専門家がその力を発揮するには、別の分野からの専門的な支援も必要です。保育士の経験が蓄積されれば対応できるのではという意見もありますが、それだけではなく、異なった視点の専門家からアドバイスがあることで、より大きな力を発揮できる、それがコンサルテーションだと思います。

**増沢** 本当にそうですね。さらに、この仕組みは、保育士だけでなく、実は心理士の成長にも繋がるのです。心理士

も、保育士は何に困っていて、どういった手立てを持っていて、どうするかを知ること、それまでの自分の枠組みを超えて理解ができ、コンサルテーションの質も向上するので。ケースを通して皆で相談しあうことで、それまでのやり方を超えて新たなものが見えてきます。お互いに成長できるのです。

**濱** 今後、事業を拡げていくにあたり、臨床心理士のこの分野の人材不足を懸念する声もあります。まだ保育園での仕事は珍しいのです。しかし、臨床心理士には心理査定、心理面接、地域援助、調査研究という4つの大きな仕事の枠組みがあるようですが、このモデル事業のような「地域援助」の役割も大事です。今、その分野に適任の人材がいらないから事業が拡充できないと考えると、心理士にとって仕事経験の場があれば、そこに人材が集まり、その経験を通して力を付けていくものだと思います。

**関口** 旭区の取組は、課題やニーズへの対応を考える中で、必要な人や仕組みができてきたのです。今後、保育カウンセラー配置のこの取組が広まることを期待します。本日はありがとうございました。

クを作り、カンファレンスをし、一緒にケースの進行管理をしていってほしいです。その際、このケースは保育園、このケースは福祉保健センターの担当ということではなく、一つのケースに対し、この機関はこの役割、この機関はこの役割と、それぞれの機関が一緒に関わって、チームを組んで支援していくことを期待します。旭区が小さな単位で始めたこの取組は、そのチーム支援に繋がる発想だと思います。

**増沢** 今後は、今のモデル事業を他の公立保育園を拠点として広げていってほしいですね。多職種連携のネットワーク